

産官民学で取り組む山岳森林教育： 山岳科学フィールド実習A



津田吉晃（筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所）



はじめに

筑波大学、信州大学、静岡大学、山梨大学の4大学は林野庁関東森林管理局、中部森林管理局と山岳域における諸課題の解決に必要な高度専門人材の育成、調査研究、技術開発等について連携及び協力して取り組むための協定を締結している。この協定を活かし、2017年度以降、筑波大学山岳科学学位プログラム（修士課程）では毎年9月に中部森林管理局の協力の下、浅間山周辺での3泊4日の山岳科学フィールド実習を4大学の学生を対象に実施していた。しかし、コロナ禍により2020年度は実習を開催できなかった。

2021年度はコロナ禍状況を鑑みて、初の試みとして、群馬県利根郡みなかみ町にて関東森林管理局、あかや森林推進ふれあいセンター、みなかみ町役場、たくみの里などの協力の下、1泊2泊での短期間ではあったが、国有林、地域行政、地域観光・振興を結ぶ実習を開催したのでここに報告する。



←2019年度までの実習風景：3泊4日で野外実習（国有林管理、木材流通、防災、地形、生物多様性などの学習）
→ コロナ禍で実施困難に



**2021年度：みなかみ町で“赤谷の森”の森林管理
～地域振興を学べる実習をデザイン**

学生らに見て・聞いて・学んで欲しいこと

- ・環境保全問題が現在のように社会的に着目されるきっかけともなった赤谷の森の生物多様性をみてもらう
- ・赤谷プロジェクト、赤谷の森の森林管理、野生動物管理について知ってもらう
- ・ユネスコ・エコパークであるみなかみ町の取り組みをみてもらう
- ・たくみの里（道の駅）の地域振興への取り組みをみてもらう

➡ **みなかみ町の産官民のとりくみを知ること、**
それぞれの現場で活躍する社会人の熱い声、姿を現場でみて、肌で感じてもらう、
山岳、森林に関する教養を深めるだけでなく、今後の進路設計に活かしてもらう



実習内容

参加者：学生31名（筑波大20名、山梨大1名、静岡大5名、信州大5名）、筑波大教員4名、技術職員2名、ティーチングアシスタント学生3名

2021年11月8日：赤谷の森の現地視察：森林管理、野生動物管理（*事前予習動画を準備頂きました）



コロナ禍の影響で2020年度から初のプログラム全体での野外実習！

2021年11月9日：みなかみ町、たくみの里、竹灯籠、日本自然保護協会、関東森林管理局の取り組みの説明（於：みなかみ町新治支所。その後、たくみの里での現地視察、谷川岳インフォメーションセンター視察）



学生の感想

産・官・民に加え、山岳科学を学ぶ学生、教員で産官民学での意見交換！

- ・林野庁の方々や現場で活躍する最前線の人々とお話することができた貴重な体験だった
- ・赤谷の森での人工林を自然林に戻すプロジェクトは、民ではできない長期的な取り組みだと思った
- ・シカの個体数増加、影響が大きくなる前に対策をすることは、非常に素晴らしいと思う
- ・植生復元の試験が興味深かった
- ・赤谷の森は、地域と林野庁が密に動くとても良い事例だと感じた。
- ・地元住民のスキー場開発への反発から、近年の大きさに発展したことはとても驚いた。
- ・イヌワシの狩場創出試験が面白かった、もっとみてみたかった
- ・森林の生命力の強さを感じた
- ・センサーを使った箱罠が実際に作動するところを初めてみれたのが面白かった
- ・自然と人の共生について考える良い機会となった
- ・みなかみ町に住んでいる様々な立場の人々が連携し、地域づくりに励んでいる姿に感動した
- ・「点と点がつがなると線になる」というお言葉があり、竹灯籠が地域の人々のつながりのように感じられた。
- ・私もみなかみ町の人々のような情熱に満ちて、人々を動かせるような人柄になりたいと思った。
- ・大都市からの集客だけでなく地域の人々を対象として町づくりをするというのが新しい視点だった
- ・林野庁の公務員の方々と地域の方々とのつながりが印象的だった
- ・個人個人の長所、「個の突破力」を生かして活動することが地域振興の上で大事だと思った
- ・匠の里は雨にも関わらず他の訪問者も多くいて、コンテンツの高さを感じた



謝辞

本実習にあたり計画段階から関東森林管理局、あかや森林推進センター、たくみの里の各関係者には多大な協力を頂きました。深くお礼申し上げます。